千年残る本物の森の実例

市の象徴「宇宙ドングリ」 中田

本物には金かからない 宮脇

――財政難の中で、どうやって緑へお金を回す工夫をしていきますか。

中田市長　市民意識調査で「税金以外に市民が緑に対して一部の費用を負担する考え方をどう思うか」と聞いてみたら、「多少なら負担してもいい」が41％、「一部を負担する必要がある」が11％。半分以上の方が、費用の一部を負担してもいいと答えています。この結果をもって緑を増やすため、市民にお金を出してほしいと短絡的に言うつもりは全然ないんですよ。ただ、いろいろな工夫の余地があるのは、読み取れると思うんですね。

例えば、子供が誕生した記念に名前のプレートをかけた木を植えるとか、あるいは記念の木を市に寄付して頂くとか。土地をみんなで共有して市民が木を植えてもいい。私有地に緑があるという場合、個人の名前をつけた公園にしたっていいと思うんです。これは私の腹案ですよ。市民とともに緑をどうやって増やすか、考えを巡らせているんです。

宮脇氏　お金がいるのは、偽物を植えるからです。大きな木でなく、土地の主役の木。ドングリなら1個1円以下ですよ。それを2年で地上部が30㌢、根群が充満したポット苗に育てたとしてもせいぜい元値は150円から200円です。1人が1000円出せば本物の幼苗が3本買える。一本何万円の大きな木で、1年保証で18カ月で枯れるようなものでなく、小さくても大きくなる、深根性、直根性の土地本来の樹林になる木です。一番安くて将来管理費がいらない、火事にも地震にも耐えられる、それが本物なんですよ。

中田市長　スペースシャトルに乗る野口聡一飛行士から、横浜出身なので何か横浜のものを持って行きたいと申し出を頂きました。いろいろ検討をし、結論はドングリにしたんです。市民に広く緑というものを意識してもらうために「野口さんと一緒に宇宙に行ったドングリがこれだ。そして宇宙に行ってきた木がこうなった」という象徴的なものになると思ったんです。ドングリは何がいいだろうと宮脇先生に相談し、横浜に一番合うものを選んで頂きました。

宮脇氏　本物のシイやカシ類は何百年と残っていますからね。厳しい中でもびくともせず生き残り親分になる木。シイ、タブ、カシ類の種を緑政局で準備してもらって、そのドングリの木が全市にそして日本中に広がる。それが中田市長の夢であり、横浜市民350万人の夢でもあります。

みやわき・あきら　その土地に元々生えていた「ふるさとの木」で森を再生する独自の植栽法を実践し続けて30年以上になる。一万数千カ所の現地調査を踏まえて国内で手がけた森づくりは約780カ所。90年以降、マレーシア、ブラジル・アマゾンで熱帯林再生に取り組み、中国でも植林活動を続ける。横浜国立大学名誉教授、財団法人国際生態学センター研究所長、財団法人横浜市緑の協会特別顧問。著書の「植物と人間」で毎日出版文化賞。28年生まれ。岡山県出身。

防災に欠かせぬ樹木 宮脇

命守るグリーンベルト 中田

――防災と森づくりというテーマに移りたいと思います。阪神大震災でも本物の森は燃えませんでした。

宮脇氏　データがあります。関東大震災で陸軍省被服廠跡に4万人が逃げて、20分で3万8000人が死んだ。もう一つが、4㌔ほど下がった今の清澄公園に昔の樹林帯があって2万2000人が逃げた。そこは、赤ちゃんが1人踏まれて死にましたがみんな助かったんです。国会に所管されてる土木学会誌に出ています。いかに本物の森が環境保全の機能を持っているか分かります。

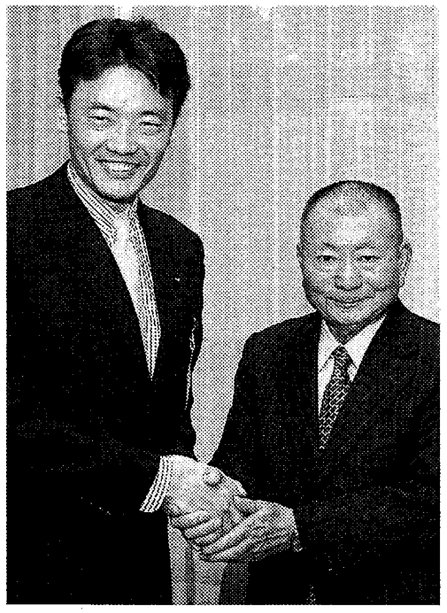
私が実際に阪神大震災で調べた時も、何百億円かけた高速道路も新幹線も鉄筋の建物も駄目だったんですけど、昔の人が知ってか知らずか植えた鎮守の森の木は、一本も倒れていない。そしてアラカシが一列あれば火はそこで止まっているんです。色々な施設が防災としてありますが、一番いいのは本物の木を植えることです。

中田市長　広域的な避難場所だけではなく、それぞれの街の中でいかにグリーンベルトを造っていけるかが、これからの課題だと思っています。地価が高かったり、はっきり言えばこの合理性や効率性を第一に考える社会の中で木を一本植えることすら、影ができるだとか通行の邪魔だとか、そういう話との戦いがあると思います。しかし命を守るという何事にも代え難いことを最上位概念に置いて、グリーンベルトを増やしていくのは重要だと思っています。

緑地としての公園、神社仏閣といったところも緑が多い。あるいは学校施設の周りにも緑がある。こうした点としての緑を今度は緑道、グリーンベルトでつなぐ。災害の時は、その緑道に沿って逃げていけば、緑の中に逃げ込めるようになる。課題はいったん出来上がった市街地にどうやって緑を増やしていくかであり、難しいことですが挑戦していきたい。

宮脇氏　お願いしたいのは、個々の一戸建てであればできるだけ生け垣にして頂く。できればベビーカーやおじいさんおばあさんも行けるようなところに小公園があって、憩いの場所として樹林に囲まれている。それが緑のコリドールでつながって最終的には緑の7大拠点など、シイ、タブ、カシ類などの火防木の木々で囲まれた緑地に車でも行けるよう本格的につながっていくことが理想です。

中田市長　その価値観を念頭に置いて、MM線の開業で無くなった東横線の跡地を緑道にしようと決めたんです。一つは東白楽から横浜駅までの部分に緑を増やしていこうと。それからもっと象徴的なのは、横浜から立体的に線路がある桜木町までの区間に緑を植えて、自転車も通れる遊歩道にしていきたいと思っています。



対談を終え握手する中田宏横浜市長と宮脇昭横浜国大名誉教授（右）＝横浜市役所で塩入正夫写す

工夫し緑増やしたい 中田

トップの決断こそ必要 宮脇

――最後に一言お願いします。

中田市長　現代の横浜の中で緑を増やしていくには、相当にいろいろなバリエーションを組み合わせなければと思っています。宮脇先生がおっしゃるように本物の木を植えていくのが一番重要な取り組みだと思います。

一方で、屋上緑化、壁面緑化など、とにかく工夫しながら緑を増やす必要がある。民間の皆さんにも協力してもらいながら、どうしても土がないところはプランターでも鉢植えでもいいと思いますから、緑を増やす努力をしていきたい。機会をとらえ、ドリームランドや桜木町の廃線跡のように思い切って緑を増やす努力をしていきたい。

宮脇氏　私は今まで国内で800カ所、ボルネオ、中国の万里の長城と森づくりをやりましたけれど、横浜市で何としてもやりたいと思っています。世界に広げるために、千年残る都市とはこういうものであるという、命の緑、森と共生した、本物の森の実例を中田市長総監督の下でつくって頂きたい。やるかやらないかはトップの決断で決まります。

市民フォーラム開催

6月12、13日 横浜で

毎日新聞社と横浜市、財団法人・国際生態学センターは、環境月間の6月12、13日、同市内で市民フォーラム「あすを植えよう 地球にいのちの森を」と「ふるさとの緑 植樹祭」を開きます。急激に失われつつある地球上の緑を回復するため、市民が主役となって木を植え、育てていく大切さをともに考え、呼びかけます。

【第1日】市民フォーラム（6月12日・パシフィコ横浜）①基調講演「かけがえのない地球へ―その再生と創造に向けて」宮脇昭・横浜国大名誉教授（国際生態学センター研究所長）②事例報告（企業・自治体・市民ボランティアグループによる森づくりへの取り組み）③総合討論「緑の再生について」

【第2日】「ふるさとの緑 植樹祭」（13日）横浜市鶴見区末広町1で1万本規模

問い合わせは毎日新聞東京本社地方部（電話03・3212・1599、成井）へ。

ことば　宇宙ドングリ

米スペースシャトル「アトランティス」に搭乗する横浜市出身の日本人宇宙飛行士、野口聡一さん(38)が、公式搭載品として市のドングリを持ち込む計画。宇宙ドングリとして緑化推進のシンボルにと、宇宙を体験したドングリの苗木を市民の手で育て、2年後に植樹する。ドングリは、ブナ科のシイノキ(20粒、20㌘)とシラカシ(35粒、40㌘)の種で、常緑高木で高さ20㍍にも達する。アトランティスは03年3月に打ち上げ予定だったが、コロンビア号の事故で延期されている。打ち上げは今年秋以降という。

対談　宮脇昭・横浜国大名誉教授／中田宏・横浜市長